

シソ科トウバナ属の多年草。本州以南の畦畔，路傍，樹園地，耕作地周辺，林縁などのやや湿った草地に生育する。茎は四角で細く，基部で匍匐枝を出し，節から根を下ろして横に這う。先の方で立ち上がり高さは10～30cmになる。葉は対生，5～15mmほどの葉柄があり，葉身は卵形～広卵形で長さ1～3cm，幅8～20mm，浅い鋸歯がある。先端は尖らずほとんど毛がない。

花期は5～9月。小花はシソ科特有の唇形花。長さ5～6mm，径3～5mmの淡紅色で，上唇は浅く2裂し，下唇は3裂する。上唇は下唇より短い。雄蕊は4本で2本が長い，それらを観察するには花が小さすぎる。

花序は茎の先端あるいは葉腋から出て立ち上がり，上部の大きなものは5cmくらいになる。花序の茎に段差を作り，それぞれの段に複数の花を輪生する輪散集散花序をつける。花序は，初めは段が詰まっていて筒状であるが成長に伴い花序茎が伸長し，指ほどの長さの多層塔を思わせる姿に変わっていく。この花序の姿が仏塔を思わせることから「塔花」と名付けられた。

陸中の遠野地方に口伝による物語がある。その口伝の説話物語は柳田国男によって「遠野物語」としてまとめられ，119の話が述べられている。しかし，それに漏れた話も多くある。その一つがこんな話である。

『田尻に太郎という男の子がいた。太郎はまだ7歳であったが，長い間，病気がちで床に臥していた。』

その太郎の家の近所に何某寺という寺があった。その寺は小さいながらも五重塔があり，お参りすることで病気が平癒することで知られていた。太郎の母は子どもの病気が平癒を願ってこの寺に日参していた。

そのお陰もあつてか，もう，夏も終わりで，朝夕は涼しげな風が吹くような頃になって，太郎もやっと床から離れられるようになった。太郎はせめて涼しい間だけでも友達と遊べないかと，庭の前の木の陰から友達たちがいないかと眺めていた。すると向こうから色の白い男の子が手に何か小さい草の花を持ってやってくるのが見えた。太郎はその男の子に声をかけようと

須藤 健一

思ったが声が出ず，男の子は太郎の顔を見ながらも通り過ぎてしまった。その後は誰も現れず，やがて日が暮れ，太郎は家の中へ戻った。

翌日もその翌日も，太郎は木の陰から友達が遊んでいないかと眺めていた。またその男の子が現れたが，同じように太郎の顔を見ながら通り過ぎていった。太郎はその男の子に何とか話しかけたいと思っていたが，話そうとすると男の子が目の前を行き過ぎてしまうのだった。

ところがその翌日，男の子の方から太郎の近くまでやって来た。そうして手に持っていた小さい草の花を太郎の目の前へ差し出した。太郎は手を出してその花を受け取ったが，小さな淡紅色の花が花軸の周りに輪のように付き，その輪の間隔があいていることから，ちょうど近所の何某寺にある五重塔のてっぺんにある九輪を思わせるような花であった。太郎は男の子をそこへ残したまま大急ぎでお母さんの元へ駆け寄って，男の子がこの花をくれたことを話した。お母さんは不思議そうな顔をして，この草は何某寺の五重塔の周りにいっぱい生えているけれどそこから採ってきたのかと太郎に尋ねた。太郎はあの子にもらったと言おうとして男の子の方を振り向いたが，男の子が立っていたはずの木の陰には誰もいなかった。』

